



2世紀末から3世紀初頭、三輪山麓の扇状地に、忽然と政治と宗教に特化された都市が出現した。それが、纏向遺跡で、巨大水路が造築され、多数の建造物（掘立柱建物、竪穴建物）や祭祀遺跡などが見つかっている。東西約2km、南北1.5kmの広さを誇る。「魏志倭人伝」に登場する邪馬台国ではないかと騒がれているが、まだ確たる証拠はあがっていない。ただし、少なくともここでヤマト政権が産声を上げたことは間違いない。また、弥生時代に盛行した、防禦を目的とする「環濠」を備えていなかったことは、注意を要する。ヤマト政権は、武力によって産み出されたわけではなさそうだ。

当初遺跡の規模はそれほど大きくなかったが、卑弥

呼の墓ではないかと疑われている箸墓（箸中山古墳）が出現した時代（3世紀半ばから4世紀）に、遺跡は大いに発展した。

各地の人々が、それぞれの文化を持ち寄り、化学反応を起こしたようで、新たな様式の土器（庄内式土器、布留式土器）が生まれ、前方後円墳が誕生していた。また同時期に、多くの人々や土器が北部九州沿岸部になだれ込んでいて、逆に朝鮮半島や北部九州の土器は、纏向ではほとんど見つからない。「渡来系の強い王と軍団が西からヤマトに移ってヤマト政権は誕生した」というかつての常識は、見事に覆された。



### 関 裕二

歴史作家、武蔵野学院大学日本総合研究所のスペシャルアカデミックフェロー。著書に『古事記の正体』（新潮新書）、『アマテラスの正体』（新潮新書）など。



所在地  
奈良県桜井市